インド密教の成就法にみる思想の儀軌化

――『サーダナ・マーラー』所収「カサルパナ世自在成就法」を中心に――

Ritualization of Thought in Sādhana Practice of Indian Esoteric Buddhism:
Focus on the *Khasarpaṇalokeśvara-sādhana* in the *Sādhanamālā*

佐久間　留理子*
SAKUMA Ruriko

This paper examines the relationship between stages or structures of sādhana practice and Buddhist thoughts on the *Khasarpaṇalokeśvara-sādhana* that is included in the *Sādhanamālā/ Sādhanasamuccaya*. In sādhana, a practitioner visualizes a deity of the Buddha, Bodhisattva, Vidyārāja, and Deva, etc. in front of him or her and, during the visualization, unites the deity with himself or herself. The stages or structure of the sādhana practice represent not only the mystical thought of Esoteric Buddhism but also the thought of Māhāyāna Buddhism such as compassion (karuṇā) and voidness (śūnyatā). In this paper, we pay attention to this inclusive aspect and indicate such aspects in the sādhana practice.

キーワード：インド密教（Indian Esoteric Buddhism）、『サーダナ・マーラー』（*Sādhanamālā*）、思想の儀軌化（Ritualization of Thought）、慈悲（Compassion）、空性（Voidness）

1.　はじめに

（1）研究の目的

本稿では、インド後期密教の成就法集成である『サーダナ・マーラー』（*Sādhanamālā*）（成就法曼）[1] を取り上げる。成就法（サーダナ）は、行者が現前に、仏（如来）、菩薩、明王、天等の尊格の姿を観想し、それとの一体化をはかる神秘主義的宗教実践方法である。そこには、密教の神秘主義的思想ばかりではなく、「慈悲」、「利他」、「菩薩行」、「空性」等の大乗仏教で強調された思想も反映されている。換言すれば、大乗仏教の思想が密教に受け継がれると同時に、それが密教独自の実践方法である成就法の中に儀軌化・具象化されている [2]。

このような成就法の包括的側面に着目し、バッタチャルヤ校訂本『サーダナ・マーラー』所収第 15 番「カサルパナ世自在成就法」（以下、第 15 番成就法と略す）[3] の構造・階梯において、大乗仏教や密教の思想・教説がどのように儀軌化・具象化されているのか、という点について考察する。ここで『サーダナ・マーラー』所収の数多くの成就法の中から特に第 15 番成就法を選ぶ理由は、そこにインド中期密教の代表的経典の一つである『大日経』との関連性がみとめられるからである。『大日経』のサンスクリット語（梵語）原典は現存しないが、第 15 番成就法は、インドにおいて『大日経』と関連する実践が行われていたことを明示する貴重なサンスクリット語の資料である [4]。

なお、本稿は、本学で開講されている「宗教学」、及び「哲学」の授業における基礎的資料として活用する予定である。

（2）先行研究と本研究の独自性

『サーダナ・マーラー』に関する先行研究には、バッタチャルヤ（1962: 134-140）、Bhattacharyya（1968a）、トウッチ（1984: 54-59; 151-153）、Meizezahl（1980: 151-157）、肥塚（1967）、森（1993; 2007）、清水（1994）、山口（1997）、桜井（2000）、奥山（2005）、立川（2015: 363-397）、佐久間（2011）、園田（2017: 368-371）等がある。

これらの諸研究の中、第 15 番成就法に関しては、その図像や階梯の概要、及び翻訳が、佐久間（2011: 107-113; 201-230; 307-313）において、また、サンスク

* 大阪観光大学観光学部／宗教学

リット校訂テキストが Bhattacharyya（1968b: 42）、Sakuma（2002: 36-42）において公表されている。

本稿では、この成就法の構造・階梯について、主に『大日経』、及びその註釈である『大日経広釈』の教説を参照しながら、その特色について考察する。このような研究は、上述の先行研究ではほとんどなされておらず [5]、独自性を有すると考えられる。

2. 第 15 番「カサルパナ世自在成就法」

(1) 成就法の本尊と『大日経』

成就法の冒頭には、その成立背景を考える上で重要な情報が述べられている。以下にその箇所を引用する。

> さて、善行を行い慈悲心のあるシュバンカラという名の優婆塞（在家の男性信者）が［存した］。まさに、彼は、ポータラカ（補陀洛）山に行き始めたが、カーディ地方にカサルパナという名の村があり、そこに留まった。聖観自在尊は、「お前はゆくな、『大毘盧遮那成仏神変加持経（大日経）』の次第によって、私［の像］を作りなさい。それによって、大いなる生類の利益が生じるだろう」と、彼に指示を与えた。そこで、彼は、すぐに本尊を作った（Sakuma, 2002: 36; 佐久間, 2011: 307）。

上述の文には、在家の男性信者が、観自在菩薩（観音菩薩）の聖地であるポータラカ山に参詣する途中、観自在から『大日経』の次第によってその像を作れ、という啓示を受けたことが述べられる。このことから、『大日経』が、この成就法の作者の思想的背景となっていた可能性が高いと考えられる。そこで、本稿では、『大日経』と『大日経広釈』[6] を参照しながら [7]、この成就法の構造・階梯について述べる。

(2) 成就法の目的

この成就法の目的は、「誓願」というかたちで成就法の冒頭において、以下のように述べられている。

> 次に、本尊の成就のために、「見解を損なうことより、むしろ比丘（男性の出家者）の破戒の方が良い」という見解の完成がなされる。次に、まずこれより、一切の法を刹那的で無我であると観じて、一切の分別を滅してから、慈悲心をもつものは、「ああ、ああ、これらの生類たちは、煩悩や業等によって悩まされている。従って、生、老、死の苦によって、甚だ苦しめられている生類たちは、多くの種類の苦を経験している。故に、私が世自在となって、彼らの苦を取り除き、全知者（仏）として安住させる」と、このように誓願する（Sakuma, 2002: 37; 佐久間, 2011: 307）。

上述の文には、「比丘の破戒」を容認する文言が登場するが、これは、半聖半俗の妻帯した行者のような存在を想定した見解と思われる [8]。この成就法の作者によれば、そのような存在であることよりも、慈悲心をたもち、本尊であるカサルパナ世自在（カサルパナ観自在）となって生類の苦を取り除き、それらを救済すること、即ち、利他の行為の方が重要であると考えられている。また、このような慈悲による利他主義は、大乗仏教において強調される [9]。

さらに、誓願文にみとめられる菩提心や慈悲心は、『大日経』の精髄とされる、いわゆる「三句の法門」（「入真言門住心品第一」第一巻）に、以下のように説かれている。

> 菩提心為因。大悲為根本。方便為究竟。（以上、『大正蔵』Vol. 18, 1b29-1c1）
> 原因は菩提の心なり。根本は大悲なり。究竟は方便なり。（以上、チベット語訳）（栂尾, 1997: 7）

この文には、菩提心が起点となり、慈悲心を基盤として、それらを巧みに用いる手段（方法）が究極的な目的であることが説かれている（頼富, 2000: 87-88）。これを上述の誓願文に当てはめれば、「世自在になろう」という菩提心が起点となり、慈悲心をもち、それを基盤として煩悩や業等によって悩まされている生類を巧みに救済することが、究極的な目的に相当すると考えられる。

このように、第 15 番成就法の誓願・目的には、大乗仏教で強調される慈悲や利他の思想とともに、『大日経』の基本的な考え方が反映されている。

(3) 成就法の目的

準備的な観想として観想の核の設定が以下のようになされる。

> ［行者］は、自らの心臓に［ある］、パムの文字より生じた、千の花弁をもつ蓮華の台（うてな）の中の、アの文字より生じた月輪（がちりん）の上に、アーハ、ターム、スーム、ブリーム、ハームという五つの種子（しゅじ）を配置する（Sakuma, 2002: 37; 佐久間, 2011: 307-308］。

この階梯では、本尊であるカサルパナ世自在とその四人の脇侍を表わす五つの種子（字音）が観想される。その後、師と仏と菩薩の招請と供養等が以下のように行われる。

> こ［の種子］の光の輪によって、それらの師と仏と菩薩を召集して導き、空中の現前に存在させ、礼拝と供養と懺悔と三帰依等の七種、あるいは、十一種の供養を行って、慈悲等の四梵住（しぼんじゅう）の修習（しゅじゅう）を行うべきである（Sakuma, 2002: 38; 佐久間, 2011: 308）。

この階梯では、いわゆる「七種無上供養」と呼ばれる供養法が実践される（佐久間, 2011: 205-206; 221-222）。これには、花等の供物による供養を精神的に内化したかたちで行うという意味だけではなく、本尊を観想し、最終的に悟りを得るための精神的な準備としての意味がある。また、四梵住は、行者の精神的な浄化を促すものであり、七種無上供養と同様に、本格的な観想に先立つ予備的行為とみなされる（佐久間, 2011: 217）。

次に、行者は「オーム、私は、空性という智金剛の自性を本質とするものである」と唱えて、空性を悟る（Sakuma, 2002: 38; 佐久間, 2011: 308）。この次第には、行者が、これまでの過程において観想した対象の実在性を否定し、それを一旦無化した後、観想対象を再設定する役割があるとみなされる（佐久間, 2011: 217）。

「空性」は、初期大乗仏教のナーガールジュナ（龍樹）（紀元２～３世紀）によって哲学的に考究された。その思想は、「世界の空であることを独自の論理によって突き詰めるとともに、元来別の起源を持つ思想である縁起（あらゆるものやことが互いに依ってあるとの考え方）と空とを結びつけることによって、徹底した空（否定）の世界でありつつ、あらゆる存在を動的なまま受け入れ得る、特異な世界を作り出す容器となった」と指摘されている（立川, 2019: 108）。

ナーガールジュナによれば、「徹底した空（否定）の世界」が悟りの境地と考えられた。しかし、密教の成就法では「空性という智金剛の自性」と述べられているように、空性は、智慧の金剛（堅固なもの）に譬えられており、むしろ実体的なものとして捉えられている。つまり、観想対象の現れを無化した後も、実体視された「空性」が残り、それを瞑想の対象にしていると考えられる。また、成就法では「空性」は、行者と本尊との一体化の前段階に説かれることが多く、実践方法の準備段階として「空性」の体験が包括されている（佐久間, 2011: 206, 225）。このように、成就法では、空性は最終的な悟りの境地ではなく、その後に続く本尊の観想やそれとの一体化によって最終的な悟りの境地が達成されると考えられている。

次に、行者は、本尊のカサルパナ世自在を以下のように観想する[10]。

> それは、秋の月のように白く、髪髻冠を頂き、頭に阿弥陀（無量光）の化仏を付け、一切の飾りに荘厳され、宝石と獅子座の上の千の花弁をもつ蓮華に遊戯坐[11]で座る。一面二臂で、左手に蓮華を持ち、右手は、不死の霊薬を流しながら与願印を示し、サットヴァパルヤンカ[12]［の脚勢］で座る（Sakuma, 2002: 38; 佐久間, 2011: 308）。

『大日経広釈』「第 2 章　マンダラを建立する真言蔵章（入漫荼羅具縁品真言品第二）」（以下、「具縁品」と略す）には、「大悲胎蔵生の大マンダラ（胎蔵マンダラ）」の中に描かれるものとして、観自在が以下のように述べられている。なお、二重カギ括弧内の語句は『大日経』本文の引用である（以下、同じ）。

> 『救世者（毘盧遮那）の北方に耐苦（勤勇）の観自在が白蓮華に坐す。［色は］螺貝や軍那華や月に等しい。頭頂に無量光が安住され、顔は少しく微笑している者を描け』とは、世尊毘盧遮那の右側・北方

の側辺に蓮華部の主たる観自在を描くことで、『観』とは、妙観察智の自性を以て諸有情を成熟させ、解脱させるために御覧になることと、清浄法界を観見することである。『白蓮華に坐す』とは、福徳と智慧の積集において、白浄な自性であることである。（中略）『［色は］螺貝や軍那華や月に等しい』とは、身の色彩は螺貝や軍那華や月のように白いものと知るべきである。『頭頂に無量光が安住され』とは、無量光は妙観察智の自性であるから、その標幟として顕れたのである（北村, 2020: 105）。

上述の文では、観自在は、妙観察智の本質をもって生類（有情）を解脱させ、救済することが説かれている。妙観察智は、阿弥陀仏（無量光仏・無量寿仏とも）の有する智であり、対象について十分に観察する智である（中村, 1985: 1302）。観自在は、この如来の智をもつ印として、頭頂に無量光（阿弥陀）仏を頂くことが説かれている。一方、上述のように、第 15 番成就法の本尊もこの仏を頂いており、妙観察智を備えているものと思われる。

次に、第 15 番成就法では、観自在の周囲に、五人の脇侍を観想する。まずターラー女神は以下のように説かれている。

［本尊の］前には、ターラー（多羅）が［存し］、金色がかった緑色で、突き出して膨らんだ乳房をもち、一切の飾りに荘厳され、両手は、青蓮華の蕾で占められ、凝視する目をもつ（Sakuma, 2002: 38; 佐久間, 2011: 308）。

上述のターラー女神は、観自在の妃となる場合もあり、四人の脇侍の中で、本尊との結びつきが最も強い。『大日経広釈』「具縁品」にはターラーが、観自在の脇侍として以下のように説かれている。

『その右に女尊の有徳にして畏怖を除かれる大名称の多羅（Tārā、解脱母）、青白にして雑色身、若年の女の容姿、合掌して青蓮華を持ち、光明などで普く囲まれ、白衣を着る者を描け』とは、観自在が有情界を観られて、自らの福徳と智慧の資糧などを、ある限りの一切有情の［利益の］ために志されて解脱されたが、［それでも］彼の余すことなき有情たちが輪廻を渡ることができないことをご覧になって、大悲力によって生じた涙から多羅なる多くの女尊を出生したので、一切有情が解脱する雑色（rūpagaṇa）であり、それゆえに多羅（解脱母）である（北村, 2020: 106）。

上述の文によれば、ターラーは、観自在の大いなる慈悲の力を表わす涙から生まれた女神であることが説かれる。また、第 15 番成就法に、ターラーが青蓮華を持つことが述べられるが、この青蓮華の意味についても『大日経広釈』には、以下のように説かれている。

『合掌して青蓮華を持ち』とは、解脱（門戸）を持っていることで、それ故、剣のごとき青蓮華(utpala)の弁葉は、般若［の利剣］ の解脱門戸の如し、と知るべきである（北村, 2020: 106）。

上述の文によれば、青蓮華を持つことは、解脱、即ち、悟りを本来的に有していることを意味する。また、青蓮華の花弁は、悟りへの基盤となる般若の智慧に譬えられている。このように、『大日経広釈』によれば、ターラーは、慈悲と智慧を兼ね備えており、第 15 番成就法のターラーにも同様の特質が備わっているものと思われる。

次に、第 15 番成就法には、スダナクマーラ（善財童子）が、以下のように説かれている。

スダナクマーラが［存し、それは］、金色に輝き、宝石でできた飾りを付け、宝石の冠を頂き、小さな蓮を左脇で支えて合掌する（Sakuma, 2002: 39; 佐久間, 2011: 308）。

スダナクマーラは、『大日経』、及び『大日経広釈』には、観自在の脇侍として説かれていない。この尊格は、初期大乗仏教経典の一つ『華厳経』「入法界品」第 27 章において登場する[13]。そこでは、スダナクマーラが、観自在の霊場であるポータラカ山を訪れた様子が説かれている。『華厳経』「入法界品」は、スダナクマーラが菩薩行とは何かを求めて五十三人の善知識（善き友）を訪問

する物語であり、観自在はその一人として登場する。スダナクマーラに菩薩行について尋ねられた観自在は、すべての世界を差別なく生類の成熟と教化に向かわせる「大悲の門」という菩薩行を説示する [14)]。このように、第 15 番成就法のスダナクマーラは、大乗仏教の菩薩行を体現していると考えられる。

次に、第 15 番成就法には、ブリクティー女神が脇侍として次のように説かれている。

> その次に、ブリクティー（毘倶胝）が［存し、それは］、髪髻冠を頂き、頭には仏塔が飾られ、金色に輝き、赤い衣を着て、右手で礼拝しながら、もう一方［の右手］で、数珠を持ち、左の二臂で、［各々］三又棒と水瓶を持つ（Sakuma, 2002: 39; 佐久間, 2011: 308）。

他方、『大日経広釈』「具縁品」には、ブリクティー女神は、観自在の脇侍として次のように述べられている。

> 『左に毘倶胝(Bhṛkuṭī)女尊、その真言鬘(数珠)を手に持ち、三目にして頂髻を具し、色は白、白と黄と赤などの光明に囲まれる者を描け』とは、観［自在］の左に毘倶胝を描くのであり、『毘倶胝』とは、因である名で果を施設することであり、観自在の眉間の内から、その女尊(妃)が出生したのであり、眉(bhurū)をしかめる(kuti)動機より出生したから顰眉女(Bhṛ-kuṭī)と言われる。女尊は忿怒の我性のみではなくて、波羅蜜などとも相応することを示し、［手に持つ］『数珠』は、波羅蜜の標幟である。『三目』は、忿怒の我性である。『頂髻を具し』とは、色究竟の諸天と同一の部族を表わしている（北村, 2020: 106-107）。

上述の文によれば、ブリクティーは、観自在のしかめた眉間から生じた女神とされる。この女神は、ターラーとは異なり忿怒の特質をもつ。また、持物の数珠は、波羅蜜の象徴とされる。波羅蜜は、大乗菩薩の六つの実践徳目である六波羅蜜を指していると考えられる。従って、この場合、数珠を持つブリクティー女神は、大乗の菩薩行を体現している。また、第 15 番成就法に説かれたブリクティー女神も数珠を持っており、同様の性格を有するものとみられる。

次に、第 15 番成就法には、ハヤグリーヴァ（馬頭）が脇侍として以下のように説かれている。

> その次に、ハヤグリーヴァが［存し、それは］、炎のように輝き、火のように燃え上がる髪をもち、蛇の飾りを付け、［身体は］赤く、鼓腹で、虎皮の衣をまとい、槍を手に持つ（Sakuma, 2002: 39; 佐久間, 2011: 309）。

ハヤグリーヴァは、日本では馬頭観自在や馬頭明王として知られているが、この場合には本尊の脇侍であり、観自在や明王としては説かれていない。一方、『大日経広釈』「具縁品」では、ハヤグリーヴァは観自在の脇侍として以下のように説かれている。

> 『その下に、真言行者は大力明王を、太陽が昇るが如き光彩、白蓮華で厳飾し、焔鬘を具し、兇悪にして、毛など獅子の如くに坐す者で、観自在の慧を具する馬頭(Hayagrīva)と称される者を描け』とは、白衣 の下辺に聖『馬頭』を描くべきであり、『明王』(Vidyārāja)とは、蓮華［部］の明王である。『大力』とは、力の功徳を具えていることである。(中略)『焔鬘を具し』とは、所知と煩悩の［二］障を焼除する智慧を具えていることであり、それ（焔鬘）で焼き尽くせば清浄法界を得たことになる。(中略)『馬頭と称せられる者』とは、法に貫通する智慧が速やかで駿馬に似ていることと、有情利益の所作の迅速性が馬（Haya）に似ているから馬頭(Hayagrīva)と言われるのである（北村, 2020: 108）。

上述の文によれば、ハヤグリーヴァの名称は、生類（有情）を救済する働きが馬のように迅速であることを示すとされる。また、ハヤグリーヴァは、明王という位置づけになっている。明王は、教化するのが難しい生類を敢えて忿怒の姿で教導する尊格であり、ハヤグリーヴァの焔鬘（燃え上がる髪）は、悟りの障害となる煩悩等を怒りの炎で焼いて除去することを表わしている。第 15 番成就法においても、ハヤグリーヴァの燃え上がる髪が説

かれており、明王に近い性格が見出される。

この他、『大日経』、及び『大日経広釈』の「具縁品」には、観自在の脇侍としてヤショーダラーと白衣の二尊が説かれるが（北村, 2020: 107）、それらは、この成就法には説かれていない。

以上のごとく、第 15 番成就法では、行者は、観想上の内的なマンダラ（カサルパナ世自在を本尊とする仏教世界）を完成させた後、外的なマンダラ、即ち、実際のマンダラを作る。そして、そこに本尊を招き寄せ、それらの供養を行った後、本尊等を送り出す（Sakuma, 2002: 39-41; 佐久間, 2011: 309-310）。

最後に、行者は次のような文言を唱え、生類の供養を行う。

> 私は一切の悪業を捨てる。私が供養の次第を終えない内に、一切の仏と菩薩の教えを、私は学ぶであろう。（中略）従って、貪（とん）と瞋（じん）と癡（ち）等を避けて、心の清浄な状態で、慈悲の心によって、まさに一切の布施等の善根が植えられるべきである（Sakuma, 2002: 41-42; 佐久間, 2011: 310）。

ここでは、慈悲心によって、布施等の善き行いをなすべきことが説かれている。これは、第 15 番成就法の冒頭に誓願・目的として説かれた慈悲・利他の実践に合致するものと言えよう。

3. 結び

以上のごとく、インド後期密教の『サーダナ・マーラー』に収められた第 15 番成就法には、『大日経』、及び『大日経広釈』にみられる中期密教的教説、即ち、「三句の法門」の思想や「具縁品」所説の胎蔵マンダラにおける観自在とその脇侍（三尊）が、大乗仏教において強調された「慈悲」、「利他」、「菩薩行」、「空性」といった思想とともに、誓願文や観想・瞑想の対象の中に取り込まれ、その構造・階梯において儀軌化・具象化されていると考えられる。

（本稿は、本学の 2020 年度「共同研究事業」（学内公募）において採択された研究課題「宗教学及び哲学の教育に関する基礎的研究：教育方法と教材を中心に」（個人研究）の成果の一部である。）

【補注】

1 紀元 12 世紀頃までに個別に成立していた成就法を一つにまとめたものである。『サーダナ・サムッチャヤ』とも呼ばれる。バッタチャルヤ校訂本（Bhattacharyya, 1968b）には、312 の成就法等が収められ、これらには、仏（如来）、菩薩、明王、天等の仏教諸尊の成就法等がみとめられる。

2 大乗仏教の思想と密教の実践体系との関連性については、先行研究において次のように指摘されている。「密教の特色は、大乗仏教の思想的な発展にみいだされるのではなく、大乗仏教が本来もっている神秘主義的な傾向と、儀礼的な要素を極端に強調し、高度に発達した大乗仏教哲学を独自の実践体系のなかに具象化した点に認められなければならない」（松長, 2002: 54）。

3 「世自在」は、「観自在」、「観音」と同義である。

4 第 15 番「カサルパナ世自在成就法」と『大日経』との関連性については、先行研究において次のように指摘されている。「さらに十二世紀頃の諸尊観想の儀軌『サーダナ・マーラー』に『大日経』の実践修行の部分などが引用されていることを見ると、『大日経』がインドで成立し、インドで人びとに信仰され、かつ実践されていたことは事実である」（頼富, 2000: 64-65）。

5 なお、佐久間（2011: 112）では、第 15 番成就法の図像部分について、漢訳・チベット語訳の『大日経』（栂尾, 1997: 44）との比較を行った。

6 8 世紀頃にインドのナーランダーで活躍した学匠の一人であったブッダグヒヤは、二種類の『大日経』註釈書を残している。即ち、(1)『毘盧遮那現等覚タントラ要義』（『大日経略釈』）（デルゲ版 No. 2662; 北京版 No. 3486）、(2)『毘盧遮那現等覚神変加持大タントラ疏』（『大日経広釈』）（デルゲ版 No. 2663; 北京版 No. 3490）であり、各々『チベット大蔵経』に収録される。本稿では、(1)よりも詳しい記述のみられる(2)の翻訳（北村, 2020）を参照する。

7 この他、『大日経』の註釈には、『大日経疏』（二十巻）が知られる。これは「漢訳の『大日経』が翻訳された直後に、師匠であるインド僧の善無畏三蔵が、弟子である中国人の一行禅師にその内容を解説した」ものである（頼富, 2000: 65）。

8 妻帯した僧について、宗教学者エリアーデは、次のように述べている。「シャーンティデーヴァ（寂天）が 8 世紀に著した大乗仏教経典の大要である『シクシャーサムッチャヤ』（『大乗集菩薩学論』『大正蔵』No. 1636）では、慈悲の精神は肉体的な愛をも是認すると説明されている。シャーンティデーヴァによると、肉体的な欲望は瞋恚（怒り）ほど罪深くはないという。結果的に、大乗仏教のさまざまな教団に妻帯した僧が現れるようになった。5 世紀に、メーガヴァーハナ王の妃がカシュミールに建てた僧院では、その僧院の半分の区域には律に則った行いを実践する比丘が止住し、残りの半分は妻子を有し家畜や財産を所有する者たちのために確保されていたという」（中村, 2005: 353）。

9 エリアーデは、大乗仏教の特質について次のように述べている。「慈悲の精神に基づいた利他主義が特に強調された。人間同士の連帯感が大乗仏教思想を形作り、その倫理を支配していた。布施の実行を拒否することは最も重い罪であると見なされた。大乗仏教では、人は誰も一人では生命を維持する力はないという信念のもとに相互に助け合うことが教えられるが、それこそが仏教者の連帯という考えの最たるものなのである」（中村, 2005: 385）。

10 バッタチャルヤ校訂本『サーダナ・マーラー』所収の成就法では、行者と本尊との一体化を説くものが多いが、この成就法ではそれは説かれていない（佐久間, 2011: 208-209）。

11 輪王坐の右足、あるいは、左足の一方を座に垂れる坐勢である（逸見, 1935: 165）。輪王坐は、左足を深く内方に屈し、右膝を直立させるものである（逸見, 1935: 166-167）。

12 「生類（獅子）を足下に敷いて座る座り方」と考えられる。なお、この場合、獅子は乗物ではなく、台座の一部であると思われる（佐久間, 2011: 311 訳注 9）。

13 梶山（1994: 349）、佐久間（2011: 110-113）。

14 梶山（1994: 346）。

15 白衣（Pāṇḍaravāsinī）は、このハヤグリーヴァの直前に説かれた観自在の脇侍の一つである。

【引用・参考文献】

日本語文献

奥山直司(2005)「『サーダナ・マーラー』成就法の花環」『インド後期密教（上）方便・父タントラ系の密教』（松長有慶編著）春秋社、pp. 161-186.

梶山雄一監修(1994)『華厳経　入法界品　さとりへの遍歴』中央公論社.

北村太道訳(2020)『全訳　ブッダグヒヤ　大日経広釈』(『大日経』系密教　原典研究叢刊２）起心書房.

肥塚隆(1967)「瞑想と造形―インド美術における一つの基礎概念―」『南都仏教』20: pp. 60-79.

清水乞(1977)「インド宗教儀礼と造形―『サーダナ・マーラー』を中心として―」『日本仏教学会年報』43: pp. 59-72.

中村元(1985/ 1981)『佛教語大辞典　縮刷版』東京書籍.

中村元監修・木村清孝・末木文美士・竹村牧男編訳(2005)『エリアーデ仏教事典』法蔵館.

佐久間留理子(2011)『インド密教の観自在研究』山喜房佛書林。

桜井宗信(2000)「Mṛtyuvañcana-Tārā とその成就法」『密教学研究』32: pp. 1-14.

園田沙弥佳(2017)「『成就法の花環』Sādhanamālā における大寒林明妃成就法」『印度学仏教学研究』66 (1) [通巻第 143 号]: pp. 368-371.

立川武蔵(2015)『マンダラ観想と密教思想』春秋社。

立川武蔵(2019/ 2003)『空の思想史　原始仏教から日本近代へ』講談社学術文庫.

トウッチ・ジュセッペ(1984)『マンダラの理論と実践』(ロルフ・ギーブル訳）平河出版社.

栂尾祥雲(1997/ 1984)『大日経の研究』栂尾祥雲全集(別巻 II)臨川書店.

バッタチャルヤ（神代峻通訳）(1962)『インド密教学序説』高野山大学内密教文化研究所.

逸見梅栄(1935)『印度に於ける礼拝像の形式研究』東洋文庫論叢 21、東京美術.

松長有慶(1969/ 2002)『密教の歴史』〈サーラ叢書 19〉平楽寺書店.

森雅秀(1993)「マハーマーヤーの成就法」『密教図像』11: pp. 23-43.

森雅秀(2007)「『サーダナマーラー』「仏頂尊勝成就法」和訳およびテキスト」『加藤精一博士古稀記念論文集：真言密教と日本文化』(加藤精一博士古稀記念論文集刊行会編）(下)、ノンブル社、pp. 137-158.

山口しのぶ(1997)「サンヴァラの七字真言『サーダナ・マーラー』No. 251」『印度学仏教学研究』46 (1): pp. 117-123.

頼富本宏(2000)『大日経』入門　慈悲のマンダラ世界』大法輪閣.

外国語文献

Bhattacharyya, Benoytosh（1968a/1924）*The Indian Buddhist Iconography*. Calcutta: Firma K. L. Mukhopadhyay.

Bhattacharyya, Benoytosh（ed.）（1968b/1925/1928）The *Sādhanamālā*. 2 Vols. Gaekwad's Oriental Series, Vol. 26, 41, Baroda: Oriental Institute.

Meizezahl, R. O.（1980）*Geist und Ikonographie des Vajrayāna-Buddhismus. Beitrage Zentralasienforshung*. Band 2, Sankt Augstin: VGH Wissenschaftsverlag.

Sakuma, Ruriko（ed.）（2002）*Sādhanamālā: Avalokiteśvara Section Sanskrit and Tibetan Texts*. Asian Iconography Series III, Delhi: Adroit Publishers.

略号

『大正蔵』:『大正新脩大蔵経』（SAT 大正新脩大蔵データベース参照）。